

第 9 章

幸福のアラビア

ヤーバーン・タマーム

サナアには三種類のタクシーがある。庶民の足は乗合タクシー（ダッバブ）で、決まったルートしか走らないので好きなどころへ行ってくれるというわけではないが、どこからでも乗り降りできる。ダッバブには日本製の小型ワゴン車（ダイハツ、スズキ、三菱）が用いられている。客の行きたいところへどこへでも行く流しのタクシーは、九割方が日本製の普通乗用車（二〇〇〇ccクラス）で、たまにプジョーや韓国車が混じっている。ホテルの前でたむろしている高級タクシーはメルセデス・ベントの独壇場、わずかにBMWが混じっている。ここに日本車の参入余地はないが、高級タクシーはまず外国人専用なので庶民には関係ない。だから庶民の乗るタクシーはほとんどすべて日本車なのである。ちなみにサナア市内にバスのサービスはない。

さて、町なかでタクシーに乗れば、運転手は普段あまり見かけないわれわれの顔を見てこいつは何人だろうかと好奇心を抱く。イエメンでは道路建設の現場などで多くの中国人が働いているので、極東系の顔を見れば、まず間違いない。

「シーニー？（中国人か）」と尋ねるだろう。

「違うよ」と答える。

「コーリー？（じゃあ韓国人か）」「違うよ」

「フィリピン人か？ベトナム人か？」あたりまでは、まだわかるが、



町なかを走っている車のほとんどは日本製である

「フランス人？ドイツ人？」なんて言い出すから
こちらは吹き出してしまふ。とうとう降参して、
「お前は一体どこから来たんだ」と尋ねる。あっ
さり答えるのも芸がないので、

「この車はどこから来たんだい」と反対に聞いて
みる。すると、ドライバーは

「あーっ！日本人か！」と嬉しそうに膝を打ち、
ついでに

「ヤーバーン・タマーム！（日本はすばらしい）」
とお世辞の一つも言うだろう。ぼくはかなりの頻度
でこのフレーズを聞いたものである。

「タマーム」というのはアラビア語で「良い」と
いう意味で、イエメンでは頻繁に使われる単語であ
る。ヤーバーンは「野蠻」ではなく「日本」である。
これが単なるお世辞かというと必ずしもそうは言い
切れない。イエメン人はけっこう本気で日本および

日本製品のすばらしさにあこがれているのだ。

例えば田舎の山のとっぺんの村に、ヤヒヤという名前の一人のおじいさんが住んでいるとしよう。ヤヒヤじいさんは生まれてこの方、聖地巡礼でサウジアラビアのメッカに行ったきり、外国はおろかイエメンの他の地方にも行ったことがない。たまにサナアに出かけるくらいのものである。村で外国人に会うことはなく、もちろん日本人など見たこともない。外の世界と接触の少ない、典型的なイエメンの老人である。

それでもこの十数年来、ヤヒヤじいさんの身の回りには時計、ラジカセ、魔法瓶、テレビ、ビデオ、カメラなど、じいさんが子供のころには一つもなかった便利なモノがだんだん増えてきた。そしてそういう便利なモノはたいてい日本製なのである。電気製品だけではない。自動車も、自家発電用の発電機も日本製であることをじいさんは知っている。さらに、最近では同じようなものを中国、韓国、香港などでも作っているが、一番良いのは日本製だということも知っている。

つまりヤヒヤじいさんは、日本人など見たことないが、日本という国がすばらしい工業国だということをよく知っているのである。だから孫の結婚祝いを買いにたまにサナアに出てきたときでも、じいさんは必ずラジカセの裏側をひっくり返してみる。そしてそこに書いてある英語を誰かその辺に立っている人に読んでもらうのだ。「Made in Japan」と書いてあれば、少し



田舎の村のよろず屋（ドゥッカーン）の店番をする老人。缶詰をはじめとしてほとんどが輸入品である。ハジャラにて。

くらい高くてもそれを買うつもりである。ことほどさように日本製品に対する信頼はきわめて高い。

もつとも、たいていの日本人がイエメンという国がどこにあるか知らないように、イエメン人も日本がどこにあるかはよく知らない。あるときムハンマドの弟で中学生のアミンが地理の教科書を広げていたので「日本はどこだ？」と冗談半分に聞いた。もちろん知っていると思っ
て聞いたのである。ところが、驚いたことにアミンは一生懸命ヨーロッパのあたりを探しているので大笑いしてしまった。しかし考えてみるとこういうことが起

こるのは、アミンが日本についてまったく無知だからではなくて、むしろ日本についてかなり明確なイメージを描いているからである。日本が先進工業国だということをアミンは知っている。そこで先進工業国の集まっているヨーロッパのどこかに日本もあるのだろうと考えたのだ。的外れな推論ではない。だからこの誤解は日本に対する評価の現れと言っているだろう。

開国してたかだか三十年足らずのイエメンの近代化の歴史は、ほぼそのまま次々に日本製品を受け入れていく過程でもあったのだ。同じアラブ世界でももっと早くから欧米社会に接していた他の国々では、車や電化製品は欧米製のモノが最初に入っていた。しかし、一九六〇年代に近代化を開始したイエメンの場合、時まさに高度成長を開始し世界市場に進出し始めていた安価な日本製品を受け入れることになったのだった。

もちろん、日本からみれば、イエメンへの輸出なんて微々たるものである。しかしイエメン人の目からみれば、日本製品の存在は圧倒的である。ある意味で日本製品は近代化を象徴しているのだ。だから「ヤーバーン・タマーム」という言葉には、単に日本に対するあこがれだけではなく、近代化それ自身へのあこがれと期待がこめられているのである。

日本とアメリカ

一般のイエメン人の日本に関する知識は、工業製品の他にもう一つ「ヒロシマ、ナガサキ」がある。多くの名前は「ヒロシ」だが、これはイエメン人にはなかなか発音しづらい。ところが、ぼくが日本人だと知ると彼らはしばしば多くの名前

をいとも簡単に「ヒロシマ」と覚えた。あるいはぼくが日本人だというと「ヒロシマ、ナガサキを知ってるよ」と言って集まってくる子供たちにもしばしば出会った。こちらが原爆の話など一切しなくてもである。

どうやらこれは一つにはテレビ、ラジオの影響、もう一つは学校教育の成果である。イエメンのテレビ、ラジオにも時折世界情勢を解説する番組があるが、ここでの基本的な認識はアラブ諸国一般にそうであるように、まずアラブの敵イスラエルがあり、それを支援する帝国主義アメリカがある、というものである。学校教育でも同じような世界観が教え込まれる。そしてアメリカがいかに冷酷無比な帝国主義者であるかということの証拠は、原子爆弾などという卑劣な兵器をヒロシマ、ナガサキに投下したことからも明らかである、ということになるのだ。イエメン人は第二次世界大戦中のアジアでの日本軍の進軍、侵略の経緯についてはほとんど知らないから、原爆投下は無条件にアメリカが悪であるという論理につながる。

特に共産主義の影響下にあった旧南イエメンではこの手の「アメリカが諸悪の根元」という情宣番組、思想教育が多かった。サナアでも南イエメンのラジオ番組は受信できたから、いっそうこうしたステレオタイプができあがりやすかったのだろう。

ところで原子爆弾まで落とされたのに、どうして今では日本はアメリカと仲良しなのか、ということが彼らの腑に落ちない。またインテリは日本が貿易摩擦などでアメリカからいじめら

れていることもちゃんと知っている。だからなおさら、日本がアメリカの言いなりになっていることが解せないのである。そこで彼らなりの解釈は、日本は表ではアメリカの言うことを聞いているが本心ではアメリカと戦っているにちがいない、ということになる。その証拠に、日本車は今やアメリカ車を打ちのめしたではないか。こう考えることで、彼らはアメリカ憎しの溜飲を下げ、日本に陰ながら拍手を送るのである。これは「敵に回すと手ごわい日本人」のイメージをつくりあげる。

一九八五年ごろ、ぼくが日本人だとわかるとすかさずカンフーのポーズをとり「ブルース・リーを知っているか？」と反応したイエメン人は二人や三人ではなかった。当時サナアの映画館では香港映画が上映されていたのだ。そしてそのアラビア語の吹き替えだか字幕の中ではブルース・リー



映画館の広告。映画館は都市のシンボルである。通常はインド映画、エジプト映画が多い。ホデイダにて。

は日本人だということになっていたらしい。ブルース・リーのパワフルさと、彼らの頭の中のエネルギーが、日本像とが簡単に結びつき、ブルース・リーは典型的な日本人像として彼らの脳裏にインプットされたのである。

勤勉な日本人というイメージもある。かなり大人数のカート・パーティーのとき、ぼくはインテリ青年イスマイルから「日本の明治時代、国費留学したのに勉強しなかった奴は、帰国してから天皇の命令で切腹させられたというのは本当か」と尋ねられて一瞬答に窮した。彼は断片的ながら、かなり日本に対する知識をもっているようだ。その場しのぎのいい加減な答はできない。そういう史実があるとは思えなかったが「天皇の命令かどうかは疑わしいが、留学して成果が上がらないときにそれを恥じて自殺することはありえる」と答えた。

するとイスマイルはその答に満足そうに頷き、そのまま今度はその場のイエメン人たちに向かってこう言った。「みんな聞いたか。日本人は留学を国家を背負う義務と考えているのだ。だからその責任を果たせないと自殺するのだ。この責任感と勤勉さがあるからこそ日本はアメリカに原爆を落とされても、一生懸命働いてアメリカを追い越す経済大国になったんだ」、なるほど。イスマイルの演説はさらに続いて「だがわれわれの留学生はどうだ？日本人のように真剣に学んでいるか？。自分の金儲けのことばかり考えているのではないか？ああ、本当にわれわれは日本人に学ばなければならぬ」と話は思いがけない方向に進んだのである。その場

にいたみんなも、その話に「さもありなん」と納得し、感心したように多くの顔を見ながらカーットの葉を口に運んでいた。「そのとおりだ、われわれを見習いたまえ」というほど厚顔ではないぼくは、くすぐったさを感じつつやはり皆と同じようにカーットの葉をちぎっていた。同時に彼らの素直に学ぼうとする態度を頼もしく思った。

ブルース・リーも切腹の留学生も、言ってみれば誤解である。しかし、根拠のない誤解ではない。この誤解は日本に対する積極的な評価に裏づけられている。彼らは真剣に彼らの社会を欧米先進国並みの近代国家にしたいと願っている。イエメン人も心底アメリカやヨーロッパが嫌いというわけではないのだ。コーラ、ハンバーガー、アメリカ映画、マイケル・ジャクソンなどにあこがれるのはこの世界の若者も同じである。近代的な都市機能、交通、通信、コンピュータ、教育、医療、保健衛生、社会サービスなどの面で欧米に学ぶべきところがたくさんあることは痛いほどわかっている。ただ、この欧米の国々のほとんどがキリスト教社会であるところが癪の種なのだ。だからこそ非欧米・非キリスト教徒で、今や世界一の技術力と経済力を持つにいたった日本を心強く思い、アメリカの自動車産業を追い越した事実を小気味よく思っているのだ。

イエメン人は近代化に向かって前進しようとしている。そしてその手本として日本にあこがれ、今のところ日本製品を手がかりにして勝手にかなり良いイメージを抱いてくれている。ス

テレオタイプではあるが、われわれがアラブ世界を「酒の飲めないイスラム教の、月の砂漠と石油だけの世界」と思い描くのは別種のステレオタイプである。

ぼくはカートを噛みながら、できることなら、彼らのこの好ましき誤解と期待にずっと背かずになりたいものだと思った。

アラブのなかのイエメン

イエメンはアラブ世界に属する国である。というよりも、イエメン人は自分たちこそアラブの源流であると自負している。アラブの系図学では、古い血筋である南方アラブ（カハターン）のほうが、他民族との混血によって形成されたとされる北方アラブ（アドナーン）よりも純粋なアラブ人であるということになっている。カハターンはノアの曾々々孫で二四人の息子を持ち、イエメンに農業をもたらしたのは彼だとされる。そしてサナアを開いたというアザル、イエメン東部のハドラマウト地方の祖であるハドラマウト、北部山岳部族の祖であるとされるヤアルブなどはいずれもこのカハターンの息子たちである。つまり、イエメン人はカハターンの直系なのだ。すなわち純粋アラブである。このことは他のアラブ世界でも広く認められている。

だが一方、イエメンは他のアラブ諸国の人々から「アラブの田舎」と蔑視されることもある。これはイエメンの後進性、保守性を指してのことである。これもまた根拠のないことではない。乳児死亡率や、文盲率、一人当たり国民所得などの点では南北イエメンはスーダンとともに常

にアラブ世界の最低線に位置してきた。

同じアラブでもこれらの点でイエメンと対照的なのがエジプトである。エジプト人は血統上は純粹アラブ人とは言えないが、経済力、政治力、軍事力などの点ではアラブの中心、アラブの先進国である。イエメンもさまざまな点でエジプトとの関係をもっている。

そもそも一九六二年の王制打倒革命を背後で指導したのは「アラブ民族主義」を掲げるナセル大統領のエジプトであった。王制（イマーム）派と革命派の内戦時代、一貫して革命派に対する軍事支援を送ったのもエジプトであった。だから、エジプトはイエメン革命の母である。ナセルがイエメンを支援したのは、アラブ世界の後進国であるイエメンを指導してやるという先進国の義務感に基づくものであった。出来の悪い弟を引っ張り上げてやる兄貴分といった感覚をエジプト人はイエメン人に対してもっている。そこには明らかにイエメンに対する優越感がある。

ぼくが初めてイエメンに行くというとき、日本で会ったあるエジプト人は「イエメンでは今でもみんな裸足なんだよ」と言った。いくらなんでも今では裸足のイエメン人をサナアで見かけることはない。悪しきステレオタイプである。

エジプトのカイロっ子のジョーク（ノクタ）好きは有名だが、なかにはイエメン人の登場するノクタもある。例えばこんなふう。ナセルが革命を視察にイエメンへ行ったとき、町なかで

立ち小便をしている田舎者が多いのを見て、イエメン大統領サラールに注意した。「こんなことでは、いつまでたつてもエジプトのように立派な国にはなれないぞ」。サラールは恥ずかしさで恐縮しきった。次にサラールがエジプトに行つたときカイロで立ち小便している人を見つけたので、ナセルに「カイロにもいるじゃありませんか」と言つた。ナセルは怒つてその男を呼びつけ職務質問させてみたら、それは駐エジプト・イエメン大使だつた、というのである。もちろん史実ではない。そもそもズボンをはかず、ワンピースの服を着ているイエメン人には立ち小便などという習慣はない。イエメン人が聞いたら激怒しそうな話だと思うが、ぼくはこのノクタをイエメン人から聞いた。

もう一つ。カイロに出かけて行つたイエメンの老人がレストランに入つた。ボーイが注文をとり、きて「何にしますか、シェイフ」と言つたので老人は嬉しくなつた。シェイフというのはアラビア語で長老、知恵者、権威者をさす言葉であり、イエメンでは当然ほめ言葉である。老人は自分の風体から立派な人物と思われたのだらうと思ひ、いい気持ちで食事をしていた。すると一匹の野良犬がレストランに紛れ込んできた。さっきのボーイは犬に向かつて「とつとと出て行け、このシェイフめ！」とわめいた。

こうしたノクタではイエメン人は常に「田舎者」あるいは無知蒙昧な人々というステレオタイプのもとに描かれている。たしかに学校教育の普及度、識字率などの点でイエメンは他のア

ラブ諸国に比して遅れている。

だからこそ学校教育を充実させることが国家の急務なのだが、そもそも教師になれるような人材が足りないのである。そこでやむなく、兄貴分であるエジプトから教師を借りることになった。現在イエメンの小学校教師の七―八割方はエジプト、スーダン、ヨルダンなどからの出稼ぎ教師なのである。サウジアラビアあたりでもやはり小学校の教師にはエジプト人が多いが、高給が得られるので優秀な教師はサウジアラビアに行っている。それに引き換え、イエメンの地方の学校はエジプト人からみても生活環境が悪いうえに、給料もたいしたことはなく（それでもエジプト国内にいるよりは多いのだが）出稼ぎにくるインセンティブが少ない。どうしても二流の教師がやってくることになる。

イエメン人もこの状態が望ましいとは思っておらず、なんとか自前の教師を育成しようとしている。なにしろ誇るべきイエメンの歴史を教えるのが、内心イエメンをバカにしているエジプト人では話にならない。現在、イエメン人には二年間の徴兵義務があるが、高校を出た者は、その時点で代用教員として一年間小学校で教えるか、徴兵に応じるかの選択をする。大学を出た段階で、先に代用教員をした者は兵役、兵役を済ませた者は代用教員としてもう一年務めることになっている。ともかくこうして自前の教員を確保しようと努力している。

一方、行政システムもまだ未発達で、政府の権威はそれほど国民の間に浸透しているとは言

い難い。当の行政制度も革命当初にエジプト人の官僚がアドバイザーとして大挙してやってきて、エジプト方式を導入した。だから、現在のイエメンのシステムは、やたらとサインを要するエジプト式システムの悪いところを引きずっている。

さらに、毎日国営テレビで流される歌番組やメロドラマはほとんどエジプトで制作されたものであり、登場人物の会話はカイロ方言のアラビア語である。このため、イエメンの田舎の人でもテレビを毎日見ていけばカイロ方言は理解できる。しかしエジプト人のほうはカイロでイエメン方言に接することなどないので、教師として赴任しても子供たちの会話が理解できないこともあるのだ。しかしエジプト人にしてみれば、田舎者のなまりなど覚えたくもないと考えているし、エジプト人はイエメン方言を理解しなくても標準語（アラビア語の標準語はコーランに用いられている書き言葉であり、アナウンサーがニュースを読むときはアラブ世界どこへ行ってもこの言葉が用いられる。これはエジプト方言とも異なる）やカイロ方言で授業をしていればそれほど支障はない。

エジプトⅡ都会、イエメンⅡ田舎という図式は確かにある。しかしイエメン人がエジプトに対してコンプレックスを抱いているだけかという点、そうでもない。十年近く続いた内戦は結局革命派が勝ったのだが、山岳地でのゲリラ戦に関して言えば、エジプト軍は近代装備の大軍を送り込みながら王制派の部族勢力を制圧することが最後までできなかった。この内戦時代の

戦闘経験から、イエメン山岳部族民は「エジプト人は近代兵器は持っているが、兵士としては女々しく、腰抜けである」という印象をもっている。

イエメン人は総論としてはエジプトをアラブの先進国、盟主として認めている。政治的影響力、人口規模、軍事力などの点で確かにエジプトは今、アラブを代表する国である。なかでも故ナセル大統領はアラブ世界全体の英雄としてイエメンでもいまだに崇拜者は多い。しかし反面、彼らの接するエジプト人たちの恩着せがましさ、見下した態度に対する反発も根強い。見下されていることを承知で、それでも出稼ぎ教師に頼らねばならない現状をイエメン人は悔しがっている。

イエメンはイエメンである。エジプトも古い歴史をもつが、イエメンはエジプトとは別の誇るべき歴史と社会システムをもっている。われわれはわれわれのやり方で、いつかきつとエジプトを追い越すのだと、イエメン人は実は心秘かに思っているのである。

アラブ世界の経済的な盟主、石油大国サウジアラビアとイエメンの間にも切っても切れない深い関係がある。なにしろ陸続きである。おまけに両国の間の大部分

には砂漠が横たわっており、あいまいな国境線は地図では点線で描かれることが多い。地図のなかには、点線どころか国境線そのものが引かれていない場合もあるが、むしろこのほうが現実に近い。

あいまいな国境を接する国どうしの間には、えてして紛争が起こりがちなものだが、過去六十年余り両国間に表だつた国境紛争はない。それはイエメンが問題を起こさないように氣を使つてきたからである。特に内戦が終了して本格的な開発を開始した一九七〇年代以降、サウジアラビアのオイルマネーのおこぼれに与かることはイエメンの開発計画にとって死活的な重要性をもつていたのだ。財布の紐を握っているサウジアラビアはイエメンにとって逆らうことのできない大国であり、機嫌を損ねてはならないパトロンであつた。

それでも自前の外貨収入源を増やそうと、観光客振興のためにイエメン観光公社はヨーロッパ人の写真家の協力を仰いでイエメンの美しい写真集を出すことにした。その本の最初のページに当然イエメンの地図が描かれていたのだが、その地図では国境線こそ引かれていなかったが、イエメン領だけが色塗りになつて残り白地図になつていた。しかし、色塗りの範囲がかなり大きく、サウジアラビアの主張する国境とはどうみても矛盾を起こすにちがいない代物であつた。サウジアラビアからクレームが出たのかもしれないし、あるいはそれを未然に防ぐ目的でもあつたのだろう。イエメン国内で売られているその写真集は地図の部分だけがびつたり糊付けされていたものである。一九八〇年代初めのこととして、当時はまだまだサウジアラビアからの援助が国の財政に大きなウェートを占めていたため、イエメン政府はサウジアラビアの神経を逆なでするようなことはしたくなかつたのだ。

国家にとってそうだっただけではない。多くのイエメン人はオイルブームに沸くサウジアラビアに出稼ぎに行き、イエメンで一生働いても稼げないような金を数年で稼いで車を買って帰り、故郷に家を建てたのである。イエメンの庶民にとってサウジアラビアで働くのはより良き生活のために不可欠なことであった。

しかし、サウジアラビアで働くのは楽しいことばかりではない。教育程度が低く技術もないイエメン人のできることといったら建設作業などの下級労働が多かった。しかし口惜しいことに、こうした労働はイエメン本国にいるときにはけっして手を染めない種類の仕事なのだった。おまけに自分たちのほうが血筋が正しいと思いつつも、サウジアラビア人にこき使われなければならなかったのである。サウジアラビア人は一般にイエメン人を貧乏で無知な隣人と見なしている。

サウジアラビアで聞いたノクタ（ジョーク）にこんなのがあった。サウジアラビアでは交通事故を起こした場合、警察の事故証明がないと修理工場で修理してくれない。しかし、警察に行くとないていサウジアラビア人に有利なように調書をでっち上げられてしまうので、外国人はサウジアラビア人にぶつけられても泣き寝入りをする場合が多かった。

あるとき、イエメン人の運転する車とエジプト人の運転する車がジェッダで接触事故を起こした。どちらも雇われドライバーで、雇用主に説明する必要があるため事故証明をもらいに警

察に行った。ちょうど昼下がり、担当の警官は昼寝中で迷惑そうに片目を開けた。二人は「事故なんですが……」とおそろおそろ言った。もちろん警官はサウジアラビア人である。警官は面倒くさそうに、

「うん？サウジアラビア人でないほうが悪い」と言った。

「いえ、どちらもサウジアラビア人ではないのですが」と二人。

「どこのどいつだ」と警官。

「エジプト人とイエメン人なんです」

「そりゃ、イエメン人が悪い」といって警官は再び目を閉じた、というのである。

サウジアラビアにおけるイエメン人の立場を象徴するようなノクタである。

一方、イエメン人はサウジアラビア人を、無教養なベドウィン（遊牧民）が石油のお金を持つようになつたがために、わがままなお大尽になつてしまった人々と見なしている。それにひきかえイエメンでは、砂漠のベドウィンがラクダを引いてうろろしていたころ、定住して農業を営み、町には豊かな物資と学問があつた。はるかな昔からわれわれは砂漠のベドウィンたちよりも豊かで、高い知識を持っていたのだ、とイエメン人は信じている。

預言者ムハンマドの時代にもイエメン人はその教養の高さで知られていた。ムハンマドが布教を本格的に開始すると、イスラム教はまずアラビア半島全体に普及していった。イスラム暦

七年（西暦六二六年）は「使者の年」と呼ばれ、アラビア半島の各地から改宗の意を示すため多くの人々がメッカを訪れた。イエメンから信徒代表としてやってきたのはアブームーサー・アルアシャーエルとその一行であった。預言者ムハンマドは彼らと会って話をしたが、そのときイエメン人の人柄のすばらしさと知識の深さに感銘を受けた。会見の後ムハンマドは周りの人々に「誠実はイエメンにあり、知はイエメンにあり」と言つたと伝えられる（この「知はイエメンにあり」は現在、サナア大学のモットーになっている）。

シバ王国以来の歴史を誇るイエメンからみれば、歴史のない国は底の浅い国である。サウジアラビアなどただか数十年の歴史しかないのだ（現サウジアラビア王国の国土の確定は一九三四年）。たまたま石油が出なかつたからイエメンは現代世界では貧乏国に甘んじていたにすぎない。歴史という点でイエメンの足元にも及ばないサウジアラビアが石油の富で近代化を進め、そのおこぼれに与かることによつてしか自分たちが稼げないという状況をイエメン人は皆、内心苦々しく思つてきた。しかし今喧嘩するのは得策ではないと判断し、またアッラーは公明正大なのでいつまでもこうした状況が続くはずがないと信じていたから、これまで我慢してきたのである。

そしてついに、アラビア半島で唯一の非産油国であつたイエメンでも一九八四年に石油が発見され、八七年にはわずかながら輸出が開始されるようになった。その後も有望な油田が次々

と発見されている。やはりアッラーは公明正大なお方であった。このままあと十年もすればわれわれは経済的に自立できるようになり、サウジアラビアに頼らなくてもすむようになるだろう、と鼻息は荒い。ただし、どんなに石油が出てサウジアラビアのような金の使い方はしない、とイエメン人は考えている。外国人労働者に国家建設の仕事をすべてまかせ、自分たちは何もせずにふんぞりかえってはいけない。自分たちの進歩は自分たちが汗して作り出すのである。これは、イエメン人が自らのサウジアラビアでの苦い出稼ぎ経験から学んだ教訓である。それに「石油は大地からの贈り物である。だから石油から得た富は大地に返さねばならない。すなわち農業の振興によって国の富を増すことこそ、アッラーの思し召しである」というのがイエメン大統領の演説である。

シバ王国以来の長い歴史の流れのなかに身を置いて考えるイエメン人にとっては、サウジアラビアとの経済格差などほんの一時のハプニングにすぎない。イエメンはいずれ必ずや立派なアラブの国としてよみがえるのだ、と確信している。その確信を支えているのは歴史に根ざしたアラブの源流としてのプライドなのである。

幸福のアラビア

イエメンの観光振興用のキャッチフレーズの一つに「Arabia Felix（幸福のアラビア）」がある。なぜイエメンが「幸福のアラビア」なのか。だいたい、現状を客観的にみればLLDCにランクされ、一人当たり国民所得も低く、識字率も低くて乳

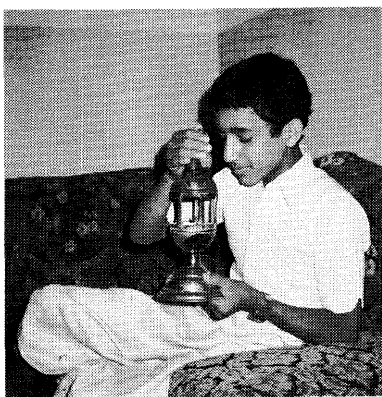
兇死亡率が高いこの国のいったいどこが「幸福」なのかといぶかる人も多いだろう。「かつてシバの女王のころ、幸福だったことがある」という昔物語としてのキャッチフレーズにすぎないのだろうか。

そもそも「幸福のアラビア」はイエメン人が自分でつけた名前ではない。昔のヨーロッパ人が勝手に作り上げたイメージなのである。

ギリシャ・ローマ時代、ヨーロッパ人はアラビアについて断片的な情報しか持っていなかった。当時アラブ商人によってヨーロッパ世界にもたらされ珍重された商品に「乳香（フランキンセンス）」があった。乳香はカンラン科の木からとれる樹液の塊で、ギリシャ・ローマの神事・祭事にはこの香料を焚きこめることが不可欠であった。乳香は南アラビアの特産で、アラブ人商人はこの産地を秘密にし流通を独占して値を釣り上げた結果、金と等価で交換されるようになった。

この高価で神秘的な乳香の産地をめぐって、ギリシャ・ローマの地理学者は聞きかじりの知識をつなぎ合わせ、さまざまな想像力を働かせてイメージを膨らませた。曰く「アラビアは乳香、没薬（ミウルラ）……を産する唯一の国」である。その乳香がいかに入手するのが困難かという「乳香を産する樹は羽のある青い蛇に守られ」ていて、その蛇は「小型だが、多彩な色彩をおび、おびただしい数のものがそこらじゅうにぶら下がっている」ので、なかなか人間

たペトラ、パルミラなどの遺跡を見れば「岩のアラビア」との命名もうなづける。「砂のアラビア」は砂漠におおわれたアラビア半島内陸部である。「岩のアラビア」「砂のアラビア」はローマ人が実際に見た知識に基づいていた。さて、「幸福のアラビア」とはどこか。それがイエメンであった。乳香をはじめとする多くの香料、香木を産し、かつ段々畑で食糧がたわわに実る地のことである。しかしローマ人はこの地については旅行者や商人からの聞きかじりの知識



香を嗅ぐ。あらたまった場では
今でも香を焚くのが正式である。

が近づけない。だから「樹液を採取するには雄牛の皮を身にまとわなければならない」のであるという。これは紀元前五世紀のギリシャのヘロドトスの記述である。

もう少し時代が下ると、失敗したアレキサンダー大王のアラビア半島征服遠征時の知識なども加わってアラビアに関する知識が増え、ローマの地理学者はアラビアには三種類あることを知るようになった。曰く「岩のアラビア」「砂のアラビア」そして「幸福のアラビア」である。「岩のアラビア」とは現在のシリア、ヨルダンあたりで、岩をうがって作られ

しかもちあわせておらず、この「幸福のアラビア」も実は「はるかかなたに未知の幸福の国がある」というロマンチズムの産物であったのかもしれない。

ヨーロッパとアラブとの接触は、その後イスラム帝国の拡大とキリスト教徒によるイベリア半島奪回（レコンキスタ）さらには十字軍の遠征などの対立を通じて継続し、この結果、ヨーロッパ人の間には「敵としてのアラブ」観が確立する。しかし「幸福のアラビア」は依然として秘密のベールに包まれたままであった。

十七世紀になってモカ港から新たな「神秘の飲料」コーヒーが積み出されるようになると、再びヨーロッパでは「幸福のアラビア」への興味が高まった。しかし、急峻な山岳地に住むイエメン人は異教徒・よそ者を歓迎しなかったので、多くのヨーロッパ人が探検を試みては命を落とした。「幸福のアラビア」探検に最初に成功したのはデンマークの探検隊に加わったドイツ人、カールステン・ニーブルであった。一七六三年のことである。このデンマーク隊はいくつかの新種の植物を発見しはしたが、五人の隊員のうち四人までがイエメンで病を得て死亡し、生きて帰ったのはニーブルただ一人であった。イエメンで辛苦をなめたニーブルはイエメンがなぜ「幸福のアラビア」であるかはついにわからなかった。そもそもアラビア語で「右」あるいは「南」を意味する地名にすぎなかった「イエメン」という語が、たまたま「幸福」を意味する「ユムン」と同根であることからローマ人が勝手に「南アラビア＝幸福」と勘

違いしたのだという説もある。だとするとイエメンが幸福のアラビアであるなんて何の根拠もない、所詮ローマ人のでっち上げた神話にすぎないのだろうか。

しかしほくは、イエメンはやはり「幸福のアラビア」であると思う。理由は三つ。

第一に、イエメン人自身がその根拠など知らなくとも自分たちの地が「幸福のアラビア」であると確信しているのだ。このこと自体が「幸福」なことではないか。確かに貧しい国だけれど、歴史に裏づけられた一体観とプライドを国民が共有している。多くの途上国が国内の民族対立や宗教対立に苦しんでいるなかで、こうした悩みのないことは幸福である。

第二に、イエメンは歴史の節目節目に、神から祝福されたような幸運なめぐり合わせに恵まれてきた。なんの資本もなく近代化を開始した一九七〇年代には、周辺国でオイルブームが発生し、同じアラブであることで彼らから援助を受けることができた。同時に多くの国民が産油国で就業機会を得、国民の所得水準が向上した。オイルブームが下火になって援助と出稼ぎ送金が減ってきたら、今度は自国で石油が出た。さらに内戦を繰り返し（イエメン人自身によっても）当面実現不可能と考えられていた南北イエメンの統一は、東ヨーロッパ諸国の崩壊による世界情勢の激動のなかで、無血のまま悲願の実現（一九九〇年五月二十二日）を果たすことができた（イエメン人はこれを「奇跡」と呼んでいる）。ところが、さてこれからという統一直後にイラクのクウェート侵攻（一九九〇年八月二日）があり、この湾岸危機をめぐって周辺アラブ

諸国との関係が悪化した。しかしそのことがかえって統一後までもない国民の一体性を強めることになり、おかげで近隣のソマリア、エチオピアなどが内戦の泥沼化で混乱を極めているのを横目に、さまざまな危機をすり抜けながら徐々に「民主化」「複数政党制」「報道の自由」などの実績を積み上げつつある。イエメンは「運の良い国」なのである。

第三に、この運の良さは偶然ではなく、イエメン人自身の歴史への対処の仕方によるものである。アラブ人は一般に雄弁、大言壮語する傾向があるが、無愛想、口べたなイエメン人はあまり大風呂敷を広げることが得意ではない。イエメン人は自分たちが現代世界では田舎者であることを承知しており、田舎者は田舎者なりにできることを一つずつ片づけていくという堅実さをもっている。多分これは、険しい山の狭い段々畑を千年以上にわたって維持してきた人々の生活の知恵なのだろう。ローマ人は「岩のアラビア」「砂のアラビア」と並べてイエメンを「緑のアラビア」あるいは「農業のアラビア」と呼ぶべきだったのだ。

もちろんイエメンがあと十年やそこらでめざましい経済成長を達成し、近代社会に一気に変身するなんて考えられない。途上国の常として、国の内外でさまざまなハプニングに遭遇することは避けられまい。しかし、どんな事態にいたってもイエメン人はきつと自らの歴史に基づくプライドをもって対応していくだろう。できることから着実に片づけ、無理せずゆっくりと進んでいくだろう。



おじいさんと孫。幸福のアラビアのにない手は
この子たちである。

ジャンビーアにこめられた誇りを失わないかぎり、
段々畑の緑を失わないかぎり、イエメン
はやはり「幸福のアラビア」である。